

鹿児島の植物 ■

鹿児島の落葉樹 南限のブナ林

植物担当 寺田 仁志

秋になると、ここにあったのかとわかる落葉樹。紅葉の季節になるまでは気にとめる人も少ないのが現実です。落葉樹は鹿児島では1000mを超える山岳部や低い山では谷筋、川縁、伐採や土砂崩れなどの起こった山、平地では道路沿い、海岸などに多く見られます。

高標高のところで落葉樹で代表的なものがドングリをつけるブナ。ブナは高さが30mに達する高木です。鹿児島では山頂付近の風の強いところに生えるため20mに達するのはほとんどありませんが、幹の太さが70cmを超えるものもあります。降雪時の山中ではひときわ威厳を持って立っているように見えます。

ブナの幹は灰色っぽい色ですが、白い模様がついています。地衣類がついて独特の模様になり気品を感じさせます。

ブナは鹿児島から北は北海道の黒松内地区まで分布し、鹿児島のブナ林は生育の南限地になっています。日本のブナ林は森に含まれる植物の種類によってスズタケを含む降雪の少ない地域である太平洋型とチシマザサを含む降雪の多い環境に適応した日本海型に分けられますが、鹿児島のブナ林は太平洋型に分類されます。

紫尾山のブナ林を調査すると、高木層にはブナ1種が高木層を占有することが多く、亜高木層にはタンナサワフタギ、シラキ、ヤマボウシ、イヌシデなどの落葉樹の亜高木やシロダモ、シキミ、アカガシなどの常緑樹も混じっています。低木の中にはシロモジの他、オトコヨウゾメ、ドウダンツツジ、ウリハダカエデなどが、草本層にはツクシガシワやコミヤマカタバミ、フタリシズカ、ナツトウダイ等の絶滅危惧植物なども生え平地では見られない植物がふんだんに見られます。

とはいえ、草本層にはシカの食害が著しくほとんど植物が見つかりません。その中でシカが避ける有毒成分を持つヒメテンナンショウやマツカゼソウ、ツクシガシワなどが群落を作ることもあり、これにも驚きます。



果実をつけたブナ

鹿児島のブナ林は太平洋型といってもアカガシやウラジロガシ、シキミ、ハイノキなど常緑樹が混じる独特のもので。

氷河期には鹿児島の低地部までブナが生えていましたが、温暖化とともに低地部のは消滅し、高い標高のものだけになりました。ウラジロガシやアカガシなどの高木の照葉樹が進出してきて、山頂付近に追いやられ、まさに崖っぷちの森になってしまいました。

ブナは九州で一番高い屋久島にはなく、県本土の紫尾山、霧島山、高隈山の3地域だけに森があります。

紫尾山は電波塔があって車で山頂までいける山で、じっくりブナの林を見るにはおすすめのところ。山頂部の電波塔のあるところから南側に延びる尾根部にブナの林が続きます。

また、南限の高隈山では大籠柄岳～横岳に続く稜線の尾根筋から北～西斜面のわずかな部分にブナ林が見られます。

この尾根では北を向いた面だけにブナは生え、頂上部はアカガシが混じり南斜面ではブナはほとんど見あたりません。ブナは冷涼で湿潤な環境を好むため南斜面は乾燥が強くなるためと考えられます。秋にブナが尾根に沿って紅葉した様は見事なものです。



高隈山のブナ林

さて北限地

北海道のブナの葉と鹿児島のブナの葉を比較すると北の葉は薄くて広くなり、鹿児島のものの3倍近くになっています。この傾向はブナだけでなく、ミズナラやカシワも同様のものがあります。北に行くほど日差しが弱くなるため同じ同化量を保つには受光する面積を増やした方がよく、一方南の方では光を効率よく利用するため葉を厚くした方がメリットがあるためと考えられます。

ブナ林の中はシイ林やタブ林などの照葉樹林に比べて明るく、晴れた日はさわやかな気分してくれます。まもなく秋。時間とともに変わっていく鹿児島の貴重なブナ林に行ってみませんか。